
ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズからのメッセージ

渡部拓也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズからのメッセージ

【Nコード】

N5161P

【作者名】

渡部拓也

【あらすじ】

ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズが寄付金を集めるために体を張ってチャリティイベントを開催！

熱湯風呂、バレーボールケツキャッチ、パイ投げ、バンジージャンプと命を賭ける！

みなさんぜひウィキペディアに寄付を！

ジミー「こいつらなんで寄付しないんだよ!」

秘書「怒ってもしょうがないでしょう。ページを開くことにうざいおっさんの写真が表示されるんですから」

ジミー「うざいつて誰のことだよ! 僕か? 僕のことか?」

秘書「笑顔がキモいんですよ」

ジミー「ファック! 秘書に悪口言われてる! マジファック!」

秘書「八つ当たりでウィキリークスにF5アタックしないでください」

ジミー「トップページ(<http://www.wikileaks.ch/>)のこいつうぜえんだよ!」

秘書「そんなことする暇があるならお金持ちの誰かに寄付金を募ればどうですか」

ジミー「……それもそうだ」

ジミー「そっぴやアサンジは逮捕されたか」

ジミー「オバマの野郎、僕が電話してるんだから出るよ!

これにはジミーも苦笑い!」

ジミー「すみませんでしたプーチン様」

ジミー「箱壊しまくって無償修理に出してやる」

ジミー「クソが……クソが……」

秘書「どうしたんですか」

ジミー「僕は友だちが少ない」

秘書「毎日PCの前で編集合戦してたら当たり前でしょう」

ジミー「クソが……マジファック……」

秘書「チャリティイベントでもしたらどうですか」

ジミー「チャリティイベント？」

秘書「はい。ミュージシャンがライブをやったりするあれです」

ジミー「友達のいない僕が誰を呼べと？」

秘書「……」

ジミー「秘書にそんな目で見られる筋合いはないよ」

秘書「それならジミーさんがやればいいじゃないですか」

ジミー「ふむ……どういイベントをやればみんなウィキペディアに寄付してくれるだろう？」

秘書「考えがありますので、明日スタジオに来てください」

秘書「じゃ今から収録するんで着替えてください」

ジミー「収録？ 着替え？ ……これは？」

秘書「赤フンです」

ジミー「なぜ？」

秘書「いいから着替えてこいつつつてんだろ」

ジミー（最近なんか秘書くん態度悪いな……）

ジミー「着替えてきたけど」

秘書「じゃ、これに浸かりながら『ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズからお願い』にあるメッセージを読んでください」

ジミー「え？ これ、めっちゃぐつぐつ煮立ってるんだけど」

秘書「知らないんですか？ 日本ではこの熱湯風呂に浸かって宣伝するんですよ」

ジミー「……火傷するだろ、常識的に考えて」

秘書「実際に効果があるというデータがあります。寄付、してもらいたいんでしょう？」

ジミー「……しょうがない」

秘書「収録開始しますんで、準備してください。終わったらようつべにアップしますから」

ジミー「……さすがにぬるま湯だよな……？」

秘書「ジミーさん？」

ジミー「うん、OK」

秘書「じゃ、スタート」

ジミー「うわ、めっちゃ熱そう……」

ジミー「みなさんこんにちは。ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズです。今回は」

カンペ（巻いて巻いて！）

ジミー「えー、今回は私がこの熱湯風呂に入り、根性を見せますので」

秘書（はよ入れ！）

ジミー「うわ、押すな、押すなよ！」

バシャーン

ジミー「あつつ！ 熱い！ 熱い！ たすけて！ 熱い！ あつつ！」

秘書「どうして出るんですか」

ジミー「バーロー！ あんな熱湯に入れるわけないだろ！ まったくもう、皮膚が真っ赤だよ……」

秘書「テイク2いきますんで」

ジミー「ええー……マジ？」

秘書「寄付金のためです」

ジミー「……マジファック」

秘書「あ？」

ジミー「張りきっていこう！」

ジミー（やっぱ無理だろ……）

ジミー「みなさんこんにちは。ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズからのお願いです」

ジミー（足からそれ！）

ソロオー

ジミー「ぐっ……あつつ、じゅ、10年前は、わ、わ、私が、ぐぐ……ウィキペディア……のこと、こと……あっ、あつiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……」

ゴロゴロゴロゴロー

ジミー「足！ 足燃える！ 氷！」

秘書「……クソが」

ジミー「はああああああああ！？ あれだけやって寄付金10ドルって！ マジファック！ タダでウィキペディア見てるくせに、金出せや！」

秘書「世界中にあんな醜態を晒しておいてよく言いますね」

ジミー「君がやらせたんじゃないか！ あれから1週間、ずっと足をひきずってるよ！ おまけにあの動画、削除しても削除しても誰かがアップするし！」

秘書「そんなことより、運営費用が全然足りなくてこのままじゃクソペディア閉鎖しそうです」

ジミー「えっ、君今なんて言った？」

秘書「別に何も」

ジミー（聞き間違いか……ほっ）

ジミー「っていうかそんなことよりって！ 僕の体のことをもっと心配しろよ！ 秘書だろ！」

秘書「チッ」

ジミー（こわ……）

秘書「どうでもいいんですけど、またチャリティイベントをやりましょう」

ジミー「ええー……できれば熱いのはもう嫌なんだけど……」

秘書「大丈夫です。明日またスタジオに来てください」

秘書「どうぞ、着替えです」

ジミー「これ、見たことある。怖い」

秘書「今回は熱湯は使わないんで安心してください」

ジミー「……信じるよ？」

ジミー（ていうか僕ってけっこう偉いし、赤フン姿とかちょっと恥ずかしいんだけど……）

秘書「じゃ、そこに立ってください」

ジミー「なんだ、普通に撮影するのか」

ジミー「ここでもいい？」

秘書「はい。メッセージを読んでる間にバレーボールが飛んできま
すけど、気にしないで続けてください」

ジミー「えっ、何？」

秘書「ですから、ジミーさんのお尻に向けてバレーボールをぶつけ
ますけど、気にしないでいいんで」

ジミー「ちょちょちょちょ、聞いてないけど？」

秘書「今言いました」

ジミー「ひええええウィキペディア創設者の僕のお尻にバレーボ
ールぶつけるって正気の沙汰じゃないよ」

秘書「大丈夫です」

ジミー「あの、ちょっと先に1球打ってみてくれる？」

秘書「いいですよ」

バシュン！

ジミー「ちょちょ、今200キロくらい出たよね？」

秘書「せいぜい100キロです」

ジミー「それでもやばいって！ そんなのお尻に当たったら」

秘書「はよそこ立てや。金いるんやろ」

ジミー「はい」

ジミー「みなさんこんにちは。ウィキペディア創設者ジミー・ウェ
ールズからのお願いです。10年前は、私がウィキペディアのこと
を話したすと皆がへんな顔ペでいあッ！」

カンペ（続けて！）

ジミー「いったあ！ お尻痛い！」

カンペ（続けて！）

ジミー「（クソが……痛いんだぞ！）えー、皆がへんな顔をしました。共有すること、ただそれあさんじッ！」

カンペ（巻いて！）

ジミー「痛い！ 思わずアサンジって叫んじゃった！」

秘書「収録中ですよ」

ジミー「（ぐ……あとで見てろ）ただそれだけのために、世界中から集まったボランティアういきッ！」

ジミー「痛いつて！ お尻もげるから！ ぼろんって梨狩りみたいにもげるから！」

バシюнバシюнバシюнバシюн！

ジミー「ちょ、やめろよ！ いたっ、痛い！ 顔！ 顔に！ 痛い！」

秘書「あはははは」

ジミー「痛い！ もうやだ！ 帰る！」

秘書「……楽しかったのに」

秘書「朝からウィキペディアンと編集合戦ですか」

ジミー「こいつらうぜえええ！ 僕のページにあることないこと書きやがって！ こないだなんかウオンバットの顔に僕の顔カラージュしやがったんだぞ！」

秘書「そういえば日本でも反響があつたみたいですよ」

ジミー「マジで!? あいつら金持ちだし寄付してくれるだろうな!」

秘書「えーと、ほら、この動画(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13020604>)で紹介されてます」

ジミー「……マジファック! クソジャップ死ねよ! こんなもん作ったらまた編集合戦になるだろうが! 僕はゲイじゃないんだよ!」

秘書「こんな筋肉もないただのメタボですしね」

ジミー「それは関係ないだろ! ところで!」

秘書「はい」

ジミー「先週分の寄付金5ドルってどういうことだよ! なんで減ってるんだよ!」

秘書「熱湯風呂より楽だったからじゃないですか?」

ジミー「冷静に分析するなよ」

秘書「でもこのままアホペディアも閉鎖ですね」

ジミー「ほんとだよ……え、君今なんて?」

秘書「次は一緒に盛り上げてくれる人を募りましょう」

ジミー「無視って……僕ウィキペディア創設者だよ?」

秘書「とにかく用意しておくんで、また明日、スタジオに来てください」

ジミー「……着替えは?」

秘書「ありません。今回はジミーさんの私物のスーツで結構です」

ジミー（ほっ……どうやら変なことはやらされなさそうだ）

秘書「じゃ、みなさん中へどうぞ」

参加者A「こんちゃっす」

参加者B「ども」

ジミー「誰？」

秘書「一緒にチャリティイベントをやってくれる一般の人たちです」
ジミー「へえ、よろしく。でももうちょっと多くてもよかったんじゃない？」

秘書「察しろよ地味夫が……」

ジミー「えっ、何？ 聞こえなかった」

秘書「何でもありません。ウィキペディアのトップページで募集をかけたんですが、2人の応募しかなかったんですよ」

ジミー「ええー…… どんだけ人望ないの僕……」

ジミー「で、今回は何を？ 熱いのと痛いのはもうやらないから」

秘書「パイ投げです」

ジミー「へえ、知らないけど面白そうだね」

秘書「その黒い壁の前に立ってください」

ジミー「OK」

秘書「じゃ、撮影します」

ジミー（パイ投げって何だろうなあ。いつメッセージを伝えたらいいのかわからないけど……）

参加者A「ボケがああああ！」

ベチャ！

ジミー「……」

秘書「……」

ジミー「……今、さっき知り合ったばかりの人が鬼の形相で走ってきて僕の顔面にパイを投げつけてきたんだけど、夢だったかな？」
秘書「現実です、しっかりしてください。ほら、メッセージ」
ジミー「……みなさんこんにちは。ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズからのお願いです。世界中から集まったボランティアが人類の知識を注ぎ込み、巨大な知識の貯水池ができてゆく。そのような考えに対して、ビジネスの世界など一部には懐疑的な人もい」

参加者B「てめえの名前でヤフってみろよ！」

ベチャ！

ジミー「……」

秘書「……」

ジミー「……今、さっき知り合ったばかりの人が親の仇に斬りかかるような形相でウィキペディア創設者の僕の顔面にパイを投げつけてきたんだけど、蜃気楼だったかな？」

秘書「現実です、さっさとメッセージを読み上げてください」

ジミー「……ビジネスの世界など一部には懐疑的な人もいるようでし」

参加者A・B・秘書「キモいんじゃないや!!!!!!!!!!」

ベチャベチャベチャ！

ジミー「……」

秘書「……」

参加者A・B「……」

ジミー「帰る」

ジミー「死ね死ね死ね死ね……」

秘書「朝から不穏な言葉をつぶやきながら編集合戦ですか」

ジミー「ウィキペディアン全員殺す殺す殺す……」

秘書「もう、ジミーさん、今度はちゃんとチャリテイイベントをやりましょう」

ジミー「もうやだ。ウィキペディアとかどうでもいいし」

秘書「……ジミーさん、ご自分の言葉をお忘れですか？ あらゆる知識や情報を誰にでもどこにでも届けることができる、そんな理想を持ってウィキペディアを創設したんじゃないんですか？ 1人1人の力は弱くても、みんなで力を合わせれば世界を変えられると、そう信じていたんじゃないんですか？」

ジミー「秘書くん……」

秘書「それを、お金がないからって、先週の寄付金が1ドルだったからって、夢を諦めるんですか？」

ジミー「……それは……」

秘書「やりましょう。私たちは誰かのためにやるんじゃないやありません。人類のためにやるんです。そして、未来の世代のためにやるんです」

ジミー「秘書くん……！ 僕が間違ってたよ、やり直そう。今ならまだ間に合う」

秘書「それでは、明日、このメモにある場所に来てください」

ジミー「……秘書くん、意味が分からない」

秘書「ジミーさんには今からこの橋から川へ向かってバンジージャンプをやってもらいます」

ジミー「君、僕が高所恐怖症だって知ってるよね？ 100メートルくらいあるよね？」

秘書「だからこそです。ジミーさんが勇気を出すことで、世界中の人々は夢に共感し、寄付をしてくれるはずですよ」

ジミー「そうか、そうだな。まず僕が勇気を見せないと」

秘書「そうです。ということで、準備してください」

秘書「ジャンプしたらすぐにメッセージを読んでくださいね」

ジミー「分かってる。今回は……ただ僕の勇気だけが試されるんだ」
秘書「じゃあ、いつでもどうぞ」

ジミー（あのときのことを、僕はまだ覚えてる。誰もが僕を馬鹿にした。そんなことは無理だって。でも、今はどうだ？ ウィキペディアは世界を変えられると証明しつつある。誰もがウィキペディアにアクセスし、知識を共有する。そんな素晴らしい世界を保ち、発展させるために、僕は飛ぶ）

ジミー「（怖い。だけど）飛びます」
秘書「幸運を」

ヒョイツ

ジミー「あああああ！ ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズからのお願いです！ 10年前は私がウィキペディアのことを話したと皆がへんな顔をしました共有することただそれだけのために世界中から集まったボランティアが人類の知識を注ぎ込み巨大な知識の貯水池ができてゆくそのような考えに対してビジネスの世界など一部には懐疑的な人もいるようでした広告もない利益もない行動計画もない創設から10年が経った毎月3億8千万人がウィキペ

ディアを使っていますその数はインターネット接続環境にいる全人口のほぼ3分の1に達しますウィキペディアは世界で5番目に人気のあるウェブサイトです他の4つは数百万ドルの投資と膨大な数の従業員執拗なマーケティングの上に作られ維持されていますしかしウィキペディアは商業的なウェブサイトとはまったく異なりますそれはボランティアが少しずつ書き込んでいったできたコミュニティの産物ですあなたもこのコミュニティの一部ですそして私は今日皆さまにこのウィキペディアを守り維持してくださいようお願いしたいと思いますこの手紙を書いています私たちが力を合わせれば利用料も広告もないウィキペディアを維持することができますまたオープンなウィキペディアを保ち掲載された情報を誰でも好きなやり方で使えるように保つことができますまたウィキペディアの成長を助け知識をあらゆる場所に届けあらゆる人々に参加してもらうことができます毎年この時期に私たちはウィキペディアをご覧の皆さまとウィキペディアコミュニティに関わるすべての人々に向けてこの共同事業を維持するためのご助力をお願いし20ドル35ドル50ドル…と皆さまが可能なだけの額のご寄付をいただきましたもし皆さまが情報を得る場所着想を得る場所としてウィキペディアを評価してくださるのであればぜひ今すぐ行動していただきますようお願いいたしますどうぞよろしくお願いいたします！」

ジミー「追伸ウィキペディアとは人々が大きなことを成し遂げる力です私たちのような人々が少しずつウィキペディアに書き込みます私たちのような人々が少しずつ資金を出しますこれは私たちの隠れた力を集めれば世界を変えることができるという証なのです！」

ジミー「言えた　！」

ブチッ

ジミー「ういきぺでいあッ！」

？「それで……計画はうまくいったのかね」

秘書「はい。現在、世界中からウイキペディアに寄付金が集まっています。彼が……ジミーさんが命を賭してくれたおかげで」

？「命、ね。彼は……生きているのだろうか？」

秘書「……さすがはご慧眼、恐れ入ります。ミスター……失礼」

？「俺は今留置所にいることになっているから、名前を出すのはまずい……」

秘書「そうでした。……お約束、どうか」

？「分かっているとも。ジミーとは腐れ縁……俺が最大限、ウイキペディアをバックアップしよう。ただし……こちらも約束は守ってもらわねばならない。寄付金の一部を」

秘書「もちろんです。……この件、ジミーに伝えても？」

？「彼は……回復したのか」

秘書「はい……ニューメキシコの牧場でのどかに暮らしています」

？「……いずれ」

秘書「は？」

？「いや、こちらの話だ。約束は守ろう。これから君が……スー・ガードナーが、彼に代わりウイキペディアを牽引していきたまえ」
スー「はい。ありがとうございます」

？「ジミー……君とは、また夜を徹して編集合戦を繰り広げたいものだな。もっとも、そのとき君は一介のウイキペディアンに過ぎないだろうが」

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5161p/>

ウィキペディア創設者ジミー・ウェールズからのメッセージ

2010年12月15日22時29分発行